

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號一第 卷一十二第

行發日一月七年四十正大

## 論叢

國債利子及官吏俸給の免稅……………法學博士 神戸 正雄

自殺統計論……………法學博士 財部 靜治

米價と關稅との關係に就て……………法學博士 河田 嗣郎

## 說苑

商品堆積の理論……………經濟學士 谷口 吉彦

インフレーションの意義并に標準に就て……………經濟學士 小川福太郎

マクスルの絶對地代と價值法則……………經濟學士 八木芳之助

## 雜錄

パンタレオニ氏業績の回顧……………經濟學士 松岡 孝兒

ジエームス・新マルサス主義……………經濟學士 岡崎 文規

統計拾穗抄……………法學博士 財部 靜治

京都帝國大學經濟學會大會記事……………委 員

## 法令

大正十四年國勢調查施行令・失業統計調查令・船檢船查規定中ノ改正

(禁轉載)

## 雜 錄

### パンタレオニ氏業績の回顧

松岡孝兒

一  
經濟學に於て、主觀及び客觀の二學派相對立して以來、此等二派を統一せんとせる權威尠からざる中、英吉利に於けるマアシャル Marshall の如きを伊太利に求めば、何人もマッフエオ・パンタレオニ Maffeo Pantaleoni 氏を推すに躊躇せぬであらう。寔に、パンタレオニ氏こそは、伊太利が生める最大なる經濟學者の一人であり、また最近三十年伊太利經濟學界の父たるべき人である。

氏はロオマ Roma 大學法科の出身、當時二十五歳にしてカメリノ Camerino 大學經濟學教授となり、爾來マチェラタ Macerata 大學、ウエネ

ツィア Venezia 高等商業學校、バリ Bari 高等商業學校に歴任し、一八九〇年銀行改善運動の急先鋒となつて其職を去り、閑地に在ること五年、一八九五年ナポリ Napoli 大學に赴き、僅か二年にして新聞紙上に政府のアフリカ戰爭に對する政策を攻撃し、當局の忌諱に觸れて再び教授の職を去り、ジュネエヅ Geneva 大學に轉じ居ること三年、一九〇〇年パツィア Pavia 大學教授となり、一九〇二年メッセダリヤ Messedaglia 教授の椅子を襲いでロオマ大學經濟學教授となり、爾來二十三年、一九二四年十月二十九日其の死に迄及んだ。此の日氏は、ミラノ Milano 年に於ける貯蓄銀行會議に病を押して出席し、其の報告に就いて加へられた批評に對して自ら辯護したのであつたが、終つて數秒後心臟に故障を來し遂に不歸の客となつた、享年數へ年で六十八歳。

氏の一生は、實に南歐的熱情に溢れた篤くべき天才のそれである。其の高潔なる人格の流露は、屢々個人的利害を超越し、それがためには

パリ及びナポリの教職を捨て、顧みなかつた。恐らくはまた其天才が、氏をして長く讀書裡のみに止めて置かなかつたとも云はれる。また一時は急進黨議員として議會に列したが、銀行事件に關聯して烈しき論争を重ね、啻に其職を捨てたばかりでなく、其財産を盪盡し、夫人は自殺を圖り遂に發狂してしまつた。

氏の研究は、政治及び經濟の各方面に亘り、伊太利の經濟學者にして其の指導を受けない者は尠いと云はれる。就中、パレト Pareto、パロネ Barone の如きは其の逸足とせられて居たが、不幸兩者とも己に師に先立つて簞を易へた。興味あることは、何れも其の始めの専攻を捨て、經濟學に志し、氏の教を仰いだことである。

氏が一八九〇年其友人等と共に手に入れた經濟統計雜誌 *Giornale degli economisti e rivista di statistica* は、所謂バンタレオニ雜誌として廣く知られて居る。同誌は其の本年三月號及び四月號の全部を割き、財政、經濟、統計等の各方面より氏の業績を述べて居る。吾々は、次に、

彼れの注目すべき論著により、そのとれる根本的立場が時代と共に如何に發展したかを顧みよう。

## 二

姑くロリア Loria の言を藉りて云へば、彼れの經濟學界に於ける運命の數奇は、哲學に於けるヘゲル Hegel に似て居る。其の學說の前後變化せるは、一見基礎的立場の那邊に在るかを捕捉するに困難を感せしめる。然し、其の經濟學的思想の發展を順次に辿る時は、一八八二年に著はせる租稅轉帳の理論 *Teoria della trazione dei tributi* に於て、彼れが古典學派に、更に突きつめて云へばリカアド Ricardo 派に、屬する人であることを看取するであらう。此の立場は、一面恐らくはフェララ Ferrara の影響に基くと云はれて居るが、他面深くリカアドの學說に傾倒し、之を基礎として其の理論を展開して居る、本書は此種問題に關する古典的論文中優秀なるもの、一とせらる。

後二年一八八四年には、伊太利に於ける私有

1) *Giornale degli economisti e rivista di statistica*, N. 3. Anno XL. P. 105 以下

財産の概算額に就いて *Dell' ammontare Probabile della ricchezza privata in Italia* が公にせられた。深刻にして精細なる研究は、かくの如き問題に關し伊太利に於て著はされたるもの、第一とせられて居り、其の國民の財産決定の方法に關する細心の觀察はまた後學に對し多くの示唆を與へたと云はれる。然し注意すべきは、彼

れが此の書中、リカアドに對し若干の吟味を試みては居るが、其の生産費の理論に對しては尙ほ依然として根本から私淑して居ること、更にまた、國民の財産をば使用價值によつて測定せんとする説に對し鋭き批難を加へて居ることは是れである。彼れは云ふ、『當事者を除いて何人が物の具體的使用價值を知るであらうか。物が重要であるとせらるゝ理由は全く恣意的のものである。或る物に就いてはそれが常に效用ありとは云ひ得ない……效用は一定の快樂又は苦痛に應じて現はれ、且つ其快樂又は苦痛の分量に應じて變化を呈する。故に效用は消費者、時及び場所に支配せられ、従つて是に恒久にして

齊一なる評價を下し得ないといふことは極めて明瞭である。』と。彼は更に其の説を支持するために、シエンジュリエ *Chebulez* の言を引き「たとひ、效用が富の本質的にして明瞭なる特性であるとしても、それは多くの人々又は多くの國々の富を評價し、比較するために何等の方法をも與ふるものでない」と斷じて居る。

後更に三年一八八七年には租稅負擔に關する理論 *Teoria della pressione tributaria* を發表したが、こは彼れの心的變化に一時期を劃したものである。本書の特色は總ての問題を限界效用の理論を基礎として展開せしめてゐる點にある。然し其の發展は一八八九年の純粹經濟學原理 *Principi di economia pura* に於て完成せられたもので、此に於て彼れの經濟學は、唯一の基礎則ち限界效用の理論の上に全く築きあげられた。同時に彼れは、限界效用が限界生産費によつて測定せらるゝことを示さんと努め、此の意味に於て價值に關する古典學派を間接に再建した。すべての場合に於て、本書はゴッセン *Gossen*

ジ・ヴォンズ Jevons メンガー Menger ワルラス  
Walras 等の效用派學說の影響を有力に受けて  
居る。

然し、後、此の見解に對する彼れの自信は次第に弱めらるゝに至つた。己にバレットも「其經濟學原論」に於て「要するに、價值をば單に效用の最終段階に於てのみ關係せしむることは、經濟學のため大した重要性はない」と述べて居るが、更に其の佛譯本によれば、生産に關する效用、效用の効果、尙ほ其の他類似の漠然たる概念を經濟學より驅除し、之に代ふるに、最少生産費及び最大利益の概念の如き明確なる觀念を以てすべきを説いて居る。尤もパンタレオニ氏の反省は、效用に就いては明示を避けては居るが、然し其の考察を全然省略するといふのではない。蓋し、特に經濟的事實が考察せらるゝ時、又は一個人のために一生産物の與へられた分量が他の生産物の他の分量に等しき時、如何なる理由によつて第一の分量に對し第二の分量が交換せらるゝかは説明し得ない。之を説明す

る爲めには、第二の分量を第一の分量よりもより好むとか、或は第二のものがより效用があるとか、より適愆性があるとかいふことを附け加へることが適當であるからである。

結局、此等の事情は、少くとも彼れの確信たる效用説を飽く迄發展させることを許さなくなつた。恰もマアシャルが其の原論に於ては效用を認めつゝ、其後の論文に於ては尙ほより純粹なるリカアド學派に復歸し來つた如く、パンタレオニ氏も亦明白に其の古き親しみある古典的理論を捨つることなく、また彼れの經濟學の鍵たる限界效用説を以て其重要性を失はしめず、かくて次第にリカアド學派に復歸し來つたのであつた。是れ即ち彼れの經濟學に於ける心的發展が拋物線に似て居るとなざるゝ所以である。其の拋物線は先づリカアドに始まり、次にデエヴォンズに接近するため漸次前者を遠ざかり、尙ほ更にリカアドに復歸するために改めてデエヴォンズを遠ざかつたことになる。

### 三

「純粹經濟學原理」の後、彼れは一般理論的著作を出さず、専らモノグラフィストとしてたつた。其の特種問題研究の多くは、デオルナール・デリ・エコノミステイ誌上に載せられたが、此等は集めて三冊となし、經濟學論集 *Scritti vari di economia* と題して發表された。尙ほ政治上の論集は、各種の題目の下に一九一七年から一九二二年の間に公にせられた。彼れは其の最後の仕事として四冊から成る經濟學に對する疑問を編纂せんとして居つたが——その二冊は理論的研究、一冊は歴史的研究、一冊は財政及統計研究——今漸く其の第一及第二冊が發表せられたに過ぎない。

彼れが伊太利以外に於て經濟學者として有名なは、主にその「純粹經濟學原理」によつてである。後年其の若干の説を改めたので再版以後は出版されなかつた、翻譯には英譯がある。彼れは、快樂主義的心理學説を採用せずして専ら觀察によつて得たる無差別の曲線を重要視するところの其の門弟、パレトの經濟學體系を評

し、その經濟的均衡の理論を以て最も嚴密なる而かも最も巧妙に成形せられたるものとなしたのである。然し他面彼れは、かくの如き普遍は、己に業に其の極限に到達せるものであるから、經濟學は對象とする函數の性質及び現實の形態を見出すを以て必要なりと論じ、従つて此の目的の爲に心理學的研究によつて與へられたる條件を以て大いに價值あるものとなし、之を看過する者を目して何等實益なきものとした。彼れの主要なる著作は次の如くである。委しくは、デオルナール・デリ・エコノミステイ誌一九二五年四月號卷末に載せられて居る。

1. *Tororia della traslazione dei tributi*, 1882.
2. *Dell'annunziare probabile della ricchezza privata in Italia*, 1884.
3. *Principi di economia pura*, 1889, seconda edizione 1894.
4. *Lo scandalo bancario di Torino. Fatti e Documenti*, 1902.
5. *Lo scandalo bancario di Torino. Nuove riflessioni e nuovi documenti*, 1903.

6. Lezione di economia politica, 1903--04.
7. Scritti vari di economia, 3 vol, 1904, 1903, 1910.
8. Legislazione sul credito e operazioni di Borsa, 1912  
—13.
9. Note in margine della guerra, 1917.
10. Politica Criteri ed eventi, 1918.
11. La fine provvisoria di un' epopea, 1919.
12. Bolcevismo italiano, 1922.
13. Temi, tesi, problemi e questi di economia politica  
ed applicata, 1923.
14. Problemi di economia, vol. I, vol. II, 1925.